



の
曙

へ遠3
467
2



門 遠 13
號 467
卷 2

浪花梅後篇園曙中卷

東都 梅暮里吾峨著

長嶋町五丁目
大野屋惣八

題四 別不忘戀

歌うた又また旧ふる年としのふる別わかれし時ときも今いまも忘わすれず
ここそあのひひひ知しさめ九こ人とよらうしとうわど悲かなしき物ものの
みしとや富とみ田の屋や徳とく右の門か娘むすめお千代よの源十げん郎ら
にありし中ちゆう別わかれしとせくよりあくあるとあらぬ山窓まどの
木き枯かせきとく吹ふつく音ねさいいと物もの夢ゆめてなみと

園曙中

か目めにうけまかせふが。マアよんでごらんあそをせ
 一亭ていとやうにうらぬうらよきふのふ「ぢふとよ
 あそをせ。お千代ちよの本と手てにとりあぢ

第一 連夢の仇言

世よの中ちゆうのきのみと曇くもやうなふと晴はれ有あ為ゐ轉變てんぺんの
 習なひとて浮世うきよの夢ゆめと今いま爰こゝは見みるも覚さるも
 三人さんにん一いつ所しよとぐに息いきが見みつらんといつ
 寐ねの目めのどきまご胡蝶ことううみと蘆生ろせいにうらむ

くうの夢ゆめ両りやうごくごくの初夜しよやのころあつりも
 きうめく藝げいはくく余所よその船ふねめ目めもつらき。
 静しずる場所ばしよとさのこひは雀岡すずおかのさえ橋際はしぎはか
 まが彼か是こゝうごひもよふくをきて中ちゆうるもの
 一人ひとりのあやうと身みに引ひうけ立聞たちきしつ
 代地よちぐり惣へひきりて飲のきと飲のる
 ぬに挑灯てんとうの火ひうげと目めあてに切きりだ
 かアかさきてきんの闇やみ星ほしにきうめく白刃はくへんの光ひかり



嬬女史章
と引て想
夫の擗を
慮心



國
明
心

亭主とくも余やど茶人ぞね。
 兄弟あふもみんどう見らた。どぶがらやどでたら
 だろしとさねて牛だらまき悪口と愚公よ佐二郎が
 せらろ色目見たらてま妹のこころが悪口と
 憎しと腹もこととどどハテおろろの生息ゆえ。
 願ふて側そかで世話もある人並くのおまへさう。血
 筋またの兄あふといふともあやしもうが世のちろひ。
 こゝろ一うらにひらひらぬぞと目づるのさきも氣

ぞらぬおろろひら独氣どくきとひらぢろろ物へらの笑
 ひとあきまあ一血筋ちま万筋まんきんの兄弟あふでも解ぬころの
 強性かうじやうの一筋縄いちしんじやうで白状はくじやうとむかひをせらるもうまら
 魚らいさなもそとにそとにもしてあきむせうがおとすも
 この鳴なびらあんまを壁かべにもさしはてする筒つつとちろろ
 施あてせど千前せんぜんの居ゐまのあひくね入いるも身の
 めんごめんごとみりあつと澤さわらぬ遠とほまへる繪えとたどら
 ぞとうとらうへませ。あ前まへさまなる苦く勞らうのあさぬま

せぬ愚おろの夫あつととづげよあつ日向ひまにまて貞女まこととつくと
 おくふのむくあひよていばむいませぬ千代「乳母うぶやこの惣そう
 兵衛べいとやうの悪あくらういが。お側そばに居ゐての苦くる勞らうらら。
 このうどえな苦くる勞らうもやせぬ私わたくしあふぶがうらまの。
 むりアところむき泪なみだの露つゆ「このお子こと「まうお氣きと
 ちうせのめさしあふむかむ泣なせりまうとて本ほんと
 目にめ懸かまぬぬ。かうと本ほんとりあげサア
 お庭にわへてもあいてあそぶ。お氣きとお晴はらうらむま

千代うがやモフ泣なぬうらめちうと跡あとと見みせとおう「そ
 てもあへるな泣なむそがまりのと千代「モフふんとうに
 泣なぬうらめちうと。まうとト。うらう又また本ほんとまうに
 こころけのうう笑わらへ
 あひらと澤さわらう遠あう廻まわるゝまゝとまうちが未ま至いたの
 めと見みらうまよ初はつ湯ゆとつううほらぬにかさ
 まうら晒あ落おちうち酔よいあまきかや正月しょうげつのおせら
 のよみ踊おどとあつあままのの見み入いるると千ち前ぜん

ちろろり呑込のみこても。いころち答こたへのころらぬ所ところう安やすら
 午ひるとあらぬも佛ほとけ神かみをさうそのおとあかの賤しんさふ。
 まご或時あるときの拳こぶしをのりかきさるらういふ〜いささだもせ
 まのと思おもひぬむのやがうらうとと益えきもまご廻まわらぬま入
 一いちころらんとらぬらうと支しとまごらう夢ゆめにもあらむ。
 額ひまのへ筋骨せきねあうらうとて我われと忘わすれて大おほ声こゑの勤番部きんぱんぶ
 屋やの枕まくら昔古むかしの功米こうまいつぎらうらう上かみ午ひるとあらうとまご本もとの
 上方うわがたにあらうとてまごく出番でばんの真まとや〜とらうら

野夫やがとりてらるま道具どうぐ猫ねこも枚子まいしも童どうもから車くるまひく
 車くるま力ちからまごの手てづま〜ま落おちらうらうさうらうよつて高たかさ
 人の弄もよおらうむ〜と極まめて是こゝが〜あよとまごん支しと防ふせ
 未至まゐのころ〜とあらうらうらう酒さけひけらうらうあよ
 びく時とき二三拳さんさんこぶしと過あやまらうらう思おも〜とらびらまあらう
 めのらう我われありらうの人ひとらう〜とその中側なかつかたのころら
 とあらうらうまごいあ〜らうらうのたうらうまごらうらう
 さの初會はつあひらうらうよく地ぢまのにあらうらうとらられ顔かほよ

色けより食氣と嘔換と初と梅見桜見船
 撻えん秋の七草紅葉たのきのつよ増る雪けき
 そと目もあきふもるど釣人までには落ぶねど
 厚味ののより菜の花とさうと湯がきくも
 ののどがあふの崎の星がまの駒方の宮戸川と飲
 て暮と身の浮世の夏へ何れも仕て喰て両后に
 いふも手前又迷つこの非面とをうて吟味とぞく
 て氣どのまきてもせんるた夏手前もとと替とせん

さる其時に幸ひと苦界とのうてやうかと思ひ
 アノ男諸をもに引とて世話にきる恩とあひく
 立入のある時簾もあふくと真綿で首の板をき
 かふあ何といふ入さ泣目と隠き心のつきさ追出
 きく夏は暑とへそをくくと泣佐次郎見る目に
 通る胸のうちあひだくると泣ふせバ吾田あうくも
 くらくめると人目あひだき立寄て背うてさうと
 泣くかふあさうと愚る身にも思ひ女房と

思入おもひがこそうらやま羨うらやまの嬉うれしとて手てとらひまさるものうちあのて
 へいりて情なさけとあらじき「まままらうとままらいひるまるあ世せ
 話かたのうへこしのが泣なみも積た瘡かさがあらうままといふ
 ちと度どで死ふとままお前ままらてあらままでいふ
 と突つ飛と傷やめらせぬと延あらじき兄あ他た人ひとのなを
 ままらしと疑ままらし此この世よの畜生ちくじやう道どうと惣そう兵へい衛ゑが
 方かたとあらじき目めに見て一兄あのの見まる前で一あ
 ちの関せきと見まるよふ心にも移うつりま荒あらまさるまま

ままらしのモとらいまらしめらしてままらしチツトあらまさる水みづ
 うらと二人にん連づで堀の内へまらし罪ざい障じやう消しょう滅めつれらが
 つとこよふ兄き淋しくも火のえと大だい夏げにしてく
 ちやトしつとそうく仕度じどと調しらへまらしと思ふま

第二途に中ちゆうの真まこと言ごん
 惣そう兵へい衛ゑハお國くにと二人にん連づにて堀の内うち妙めう法ぽう寺じの祖
 師しへまらしり駕籠かごとつつせ新しん宿しゆくあらまらし一宿しゆくのつも
 ままらしと下向げうのまらし雨う露ろもまらしく

陵ぐまきすまのこまざる葉にて作らる狭き
 小家の内に盲なる老人のたぐの人は功力を乞ふと
 まる容子もなく只一図の題目と唱へ珠數のまじり
 さま何となく使なくありひかきか側へ立よるく
 帯の間より巾着とりて「お賽銭の残りにて
 少くもすまのまじり巾着のまじり手にて
 嬉し氣に推しつゝ」
 一錢二せんの手のうちまじり情で下さるお人らまじり

は自分さまのごとくに銘く下さるお手のうち
 そまじり少くもまじり省るまじりこの澤山の
 は功力世にも情のおん方と泪をらくまじり
 胸にきつるまじり汲まじりおんおんつぐ見まじり
 顔幼とまじり別とてゆゑ定まらぬおんおん
 まじり父上と思へ胸にせらるる泪惣兵衛おん
 と心にまじり「賤まじりぬ人体のまじり人のまじり
 ろまじりねども世おある時まじり我がまじりまじりねども

渡世へてきぬに人且遠き行隅にて題目をうら
 りふさぎとも薄命の身の遠慮なく盲目さぐりに袖
 袂へまぎついても貫つが徳のあふ
 ぞびやまよまてお國さまへの新造さまぞびやま
 り惣ナゼイヤ似こ名の世間にいらもあまどぞ
 ぞしこくイヤお慈悲ぶらひ内夫婦さまは抱
 身にまよましても露の命とおむろとあやめも
 んぐらへどころと娘やうきま梓まよまて

居まもろ死もろも同せんま逢ひつらど
 ませねど非業の死とら子まのいあはも
 ろまもろ思ふ非業の死もろあはるる着
 あらぬ食えつくる身の養生やう慚あはれ世と
 ろがいたもろ宿世の悪業やうは推量下さり
 まうと涙もろの物ま
 あらへて見もろも血筋あつたもろ蜘蛛の巣の
 そがら雨の中ま
 其ま

一 ^{を食}イヤ。 ^{あぶ}あぶしく ^{お豆}お豆と ^{さぐり}さぐりも ^情情に ^{あま}あま
 め ^{うら}うらが ^罪罪 ^{サア}サア ^{さう}さうと ^千千と ^まま ^{お國}お國 ^何何と
 あ ^まま ^思思ひ ^回回 ^ああ ^のの ^まま ^もも ^泣泣 ^ここ ^はは ^袂袂 ^とと ^入入 ^らら ^めめ
 て ^駕駕 ^籠籠 ^よよ ^ああ ^らら ^とと ^伏伏 ^ああ ^づづ ^むむ ^簾簾 ^ああ ^らら ^とと ^ああ ^まま ^ああ
 心 ^にに ^つつ ^らら ^るる ^血血 ^筋筋 ^のの ^糸糸 ^のの ^やや ^とと ^ああ ^らら ^ああ ^まま ^ああ ^まま ^ああ ^まま
 る ^うう ^もも ^のの ^びび ^ああ ^らら ^耳耳 ^そそ ^ぞぞ ^ああ ^まま ^ああ ^まま ^ああ ^まま ^ああ ^まま
 か ^はは ^ああ ^らら ^どど ^ああ ^らら ^ここ ^ちち ^のの ^鐘鐘 ^のの ^ひひ ^きき ^ふふ ^らら ^らら ^ああ ^らら ^哀哀
 り ^まま ^すす ^小小 ^家家 ^のの ^戸戸 ^とと ^ひひ ^らら ^ああ ^らら ^ああ ^らら ^ああ ^らら ^南南 ^無無 ^妙妙 ^蓮蓮

華經

うがやいろそ悲しみのみ

義理の悔言

二 ^人人の ^新新宿 ^のの ^旅旅 ^宿宿 ^へへ ^泊泊 ^をを ^心心 ^まま ^づづ ^らら ^ふふ ^立立 ^出出 ^おお ^國國
 と ^駕駕 ^籠籠 ^にに ^のの ^まま ^まま ^びび ^らら ^先先 ^入入 ^らら ^うう ^らら ^うう ^らら ^うう
 内 ^へへ ^入入 ^らら ^んん ^とと ^ここ ^内内 ^とと ^見見 ^まま ^らら ^昨昨 ^日日 ^路路 ^ああ ^てて ^ああ ^ひひ
 親 ^もも ^ああ ^のの ^ひひ ^其其 ^人人 ^のの ^一一 ^間間 ^にに ^ああ ^らら ^とと ^ああ ^らら ^うう
 夢 ^をを ^うう ^らら ^現現 ^うう ^とと ^嬉嬉 ^しし ^のの ^かか ^らら ^悲悲 ^やや ^うう ^ここ ^のの ^けけ ^ささ ^ああ ^らら ^うう

胸むねきう。あま入あまいりのちまうと此こゝ所ところへを食あるま昨日きのう

の内うち新造しんぞうさまごまごぶぶいいひひひひけけやや無む理り無む体たい日ひの

ようようにに入いちちうううういいとと駕籠がごににののせせてて此こゝ所ところへ

「ささくくああいいああ休やすみああそそばばせせままかか氣き分ぶんああままうう〜〜燈あかり

でもでもつつけけててうううう緩ゆるととごごうう〜〜まませせるるここじじううううがが受う理り

づづめめでで佐次郎さじらうとと追おぎぎ〜〜親おやぢ仁にががああ国くにへへ貞まこと女むすめとと立たさせ

んんとと自みづか害がい〜〜ううままでで。ああままうう〜〜所ところでで〜〜ううままでで

「そそええうう後のちよよ見みよよふふのの乳う乳母かたややどどううもも氣き味あじのの日ひの

むむんんどどののふふ〜〜何なにととああののああそそばばののああららままうう〜〜風かぜもも吹ふぬぬ

アアノノ笹ささ藪ぶくのの音ねへへとと言いひひままごごああままううぬぬううちち雲くもつつ

よよううなな大おほ男おとこ。三さん四し人にんどどやや〜〜とと押おここ〜〜有あ無むとといい

ささぎぎどどかか千ち代よととりり〜〜アアレレイイののふふとといいひひ問まももるる〜〜ささるる

らら〜〜ととををまませせ連つ行らいいととままるる〜〜乳う乳母かたののちちららいい

ととままららつつ〜〜拂はらののけけ蹴け〜〜ととがが〜〜ととああととままららるる〜〜

逸はな失うりせ

題五 梅移水

歌に水底に誰うかいて咲花のうさうげもあま
梅がえこふ堰屋太郎左門の市中の住ひもまま
同國小濱へ手ひろる地と買求め石垣とめりく
表とりこひ其外へ堀とるまへいと嚴重るやううえ
より家富栄数尋の男女と流るい何るるゆゑにや
人に對面あるものと嫌ひ奥深くこもり居るとかや
そまゝさそおれた花形源十郎へいろく艱難辛苦と

主婦さうの行ゑとさぐく求むるといふも今以て
知得がうく早午ぐうとさうの堰屋太郎左門がうり
るまバ踏込実否とささんと決定して身のまうり
と調い大小とささんみ深あま笠にて門ふ立案内と
乞うまバ年代の者いで取つぐ 源十郎
どの在宿にもあまバ對目なることとて笠ぬきま
てくまうとのまバ年代ともハ源十郎が顔と見るとり
互に目ませ袖引換投まきき者もあれた時支配人

園 梅 水

二七

打立うちたてて塙はたけ太おが家いへも忍しのびこひこ尊たうとた寺てらへ門かどうらと自然しぜんに
 びびくく賤せん室むろの盈あふるる度どと心こころよ喜よろこ同どう毎まいくくと明あききて
 奥おく深ふかく入いららぐぐへ景けいしてしてここの廣ひろ座ざ敷しきとささぶぶるるとよよえ
 せど真まららううやや今いまのの前まへ後ごも失うしなわわららうう手てとここままぬぬい
 てどどううややと座ざへ腰こしよりよりいいごごの摺すり火ひ打うち。烟えん草そうくくああららうう—
 居ゐるるその時とき間ま毎まいの灯とう火ひいいちちどどよよつつくく。ここけけてて此この間まの
 燈とう臺だいをを柱はしらごごとよよままああけけへ銀ぎん燭じやく青せい煙えんとををののく
 かのづづらら暖あたたくく昼ひると敷あきくく万まん燈とうの光ひかりと大だい太たい郎らうら

小こ猿ざるの此この所ところににああららざるるととののいいづづららくく心こころよよああらられたた。
 四し方ほうととままららと目めををああららびびああららるる簾すだの中なかの琴ことううき
 るるもも者ものありり。行ゆ見みががややととままらら向むかひひの方かたよりよりままままららと
 ささとと切きららぬぬ切き禿かぶ茶ちや臺だいへ茶ちや碗わんととののせせ大だい太たい郎らうがが前まへへへびびて
 茶ちやととままむむ。ああけけぐぐとと長ながと見みままぞ人ひとににああららざるるて人ひと
 形かたちありり大だい太たい郎らうううららくくと笑わらひひ。一ひと竹たけ田で細こまま人ひとの目めの
 ららううままままとともも子こどどももままままららにに何なんぞぞ惑まどかかららんん。イいテて働はたらの
 根ねととままららんんととままららんんととぬぬののでで真ま二にツつ中なかよりよりままららんんと相あひ面つの

自業不可去
奸械終よ
天討稟く



園
書
七

士



園
書
七

士

狼烟のろい一いどよろろと見鐘太鼓みかね たいこうきうきに風かぜがあらまらふ
 遠卷とんまきとことあらまらふ
 鐘かねう太鼓たいこう琴ことの音ねう耳みみ安やす
 此場このまの容子ゆうま今いまひく琴ことへあき組くみのあきこといふも
 草くさの名な茗荷めいがといふも草くさの名なと其名形そのなぐちはうまらふも
 大地おほち生なまむらあまら草人間くさ じんかんの萬物ばんぶつの灵たまにいて士農工
 商しやう梅うめ民たみ雜子ざし又我また わがことたのまがたの神代かみよのむらうと
 づぬづぬ世界せかいのうち六兄弟むつせいのと八漢はつかんも倭やまともくくらぬに
 斯このあきまらたまたまひといとぬむらうの唱歌うたのあてらる

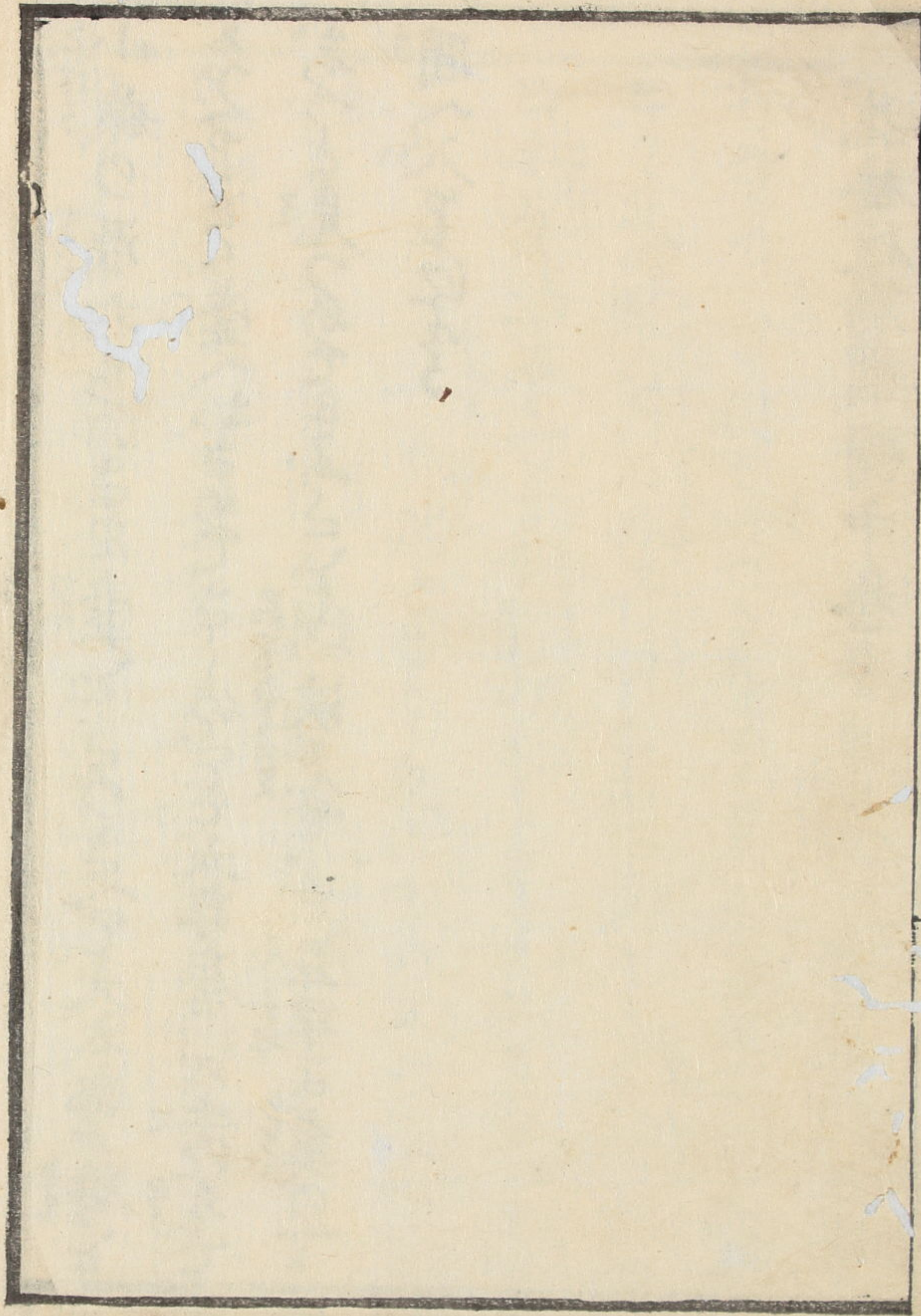
兄弟きやうてい他人たにんのををまらりと一本いっぴんどもの夜働よとら誰たれへ遠とほア上うへ
 誰たれへあまらく夏なつもるた。二十五年にじゅうごねんのうらういとまらつ立た
 寄よくまの外そとのうらう間ま近く突出ついでを鎗穂やぶ先さきとあつうと
 左右さうぶにとまらハテハテぎまらくいとまらひのけまら
 突つうく身みとらうとらうめくあまらや日ひまら。二ふたの
 首くびへ落おちてまらあまら白刃あしの血ち一いっ母ははの手てあまらうら
 うら見廻みまわまひまみまの内うちよりくまらまら鎗目やぶめ當あてら
 日ひに腹はらへへぎと突つ込こむ塩しほくびとまらうとまらうと

引ぬけど。さまが痛手にどうと座を一度にままと巻
 あげる。内にあつての太郎左門。大太郎のまよりよりく。
 主の顔とまると見て。今由身の相と見るとに簾直に
 あてあつても義あり威あつて猛らも万人のうへに
 立へき相恰あまびうく。我ごとの敵まゝ人にあつ
 ま去ばこそ此家へ忍びりり。と死財宝もつるを一度
 喜びて。ひの何とまゝ手豆あびうく心地あり切核ん
 ぞもあひひしが間口くの嚴重の蜀の臥龍が八陣と

あつてもまゝもうくあつんと進退爰にまゝまゝに逃
 去んとて死門へ行ひまゝる心と笑ひびき鎗先と
 うけまゝも運命つれて死まゝき覚悟あつるに小猿の
 源六とめてまゝるのせうく逆おひたせまゝる察する
 とまゝる吾一カとまゝるえん。あつ本心よ。まゝるまゝるにわ
 あつまゝまゝと心づまゝると末期にさんげ。一通りまゝとま
 我にも実母兄あり別とくまゝるまゝるまゝるまゝるまゝるまゝる
 めまゝるまゝるまゝるまゝるまゝるまゝるまゝるまゝるまゝるまゝる

園
曝
中

十
四



一
二
三

